清代蘇州の水辺に形成された商業空間に関する研究

—『姑蘇繁華図』を中心とする史料による考察—

A STUDY ON COMMERCIAL SPACE OF THE WATERSIDE
IN SUZHOU OF CHINA UNDER QING DYNASTY

A study with the historical material of "Gu su fan hua tu"

朱 華 方*, 土本 俊和**

Huafang ZHU and Toshikazu TSUCHIMOTO

Using the historical material of "Gu su fan hua tu" (a landscape painting around Suzhou of China painted in 1759), we could know the formation of its commercial space of the waterside, with the times of the waterborne traffic was made the base of an economic activity. It is characterized by the relation between shops and canals. The location of the waterside and the space composition of the shops are deeply related in the management. Especially, it was a location form that measured the content of the business and convenience in use in an important service industry that supported the brokerage who was the economic agent in the market.

Keywords : Qing dynasty, Suzhou, market, commercial space of the waterside, shops, banquet space, painting

清代、蘇州、市、水辺商業空間、店舗、宴会空間、絵画

1. 研究背景と目的

明清時代に中国の江南地方では、商業の発達により、商品流通が盛んになり、それにともなう、水辺に交易の場として数多くの市が形成されていた。しかし、その後、時代の変化や社会的な変動により多くの市がその姿を消した。その一方で、一部の市は発展を遂げて、市場町が形成され、鎮に昇格し、今日に至ってなお存在するものもある。そのような市場町としての鎮について、近年、阮儀三^{ルアンイーサン}が持続的に調査を実施し、鎮の都市構造および集住形態について一連の研究成果をあげた¹⁾。調査メンバーの高村雅彦は、鎮に住む住民の階層と住居形式を対応させ、それぞれの水路に即した立地の形態に着目して、高密度な都市集住を可能にした鎮の有機的な都市構造を明らかにした²⁾。しかし、近代では水運が衰退し、かつて重要な交易の場としての水辺空間が廃れていた。そのため、現状調査だけでは水上交通を経済活動の基盤とする時代に形成された水辺の商業空間を探ることは困難である。

そこで、本論では、清代江南の蘇州を描いた絵画史料である『姑蘇繁華図』を中心に、地誌などの古文獻、さらに現地調査を加え、蘇州城の附郭に形成された市における水辺商業空間の考察をおこなう。

蘇州についての既往の研究は、主に都市形成史の視点より都市空間の特徴を分析した龔繩方^{ゴンゼンフ}の研究³⁾、同様の視点を持って住宅地の形成過程を分析した鈴木充の研究⁴⁾、空間デザインの視点から計画経済期での空間形態の変容メカニズムを明らかにした王郁らの研究がある⁵⁾。しかし、いずれの研究も住宅地を対象としてい

る。また、本論と同絵画史料を用いた研究として、歴史学的な視点から絵巻物の内容全般について綿密に考証をおこなった范金民^{ファンジンミン}の研究⁶⁾、さらに、都市形態的な視点から水辺都市空間を分析した盧永春らの研究⁷⁾があるが、店舗に着目した水辺商業空間の構成が明らかにされていない。

2. 明清時代の江南社会と蘇州

唐の半ばころ、安史の乱が起こり、多くの人が紛争から逃れるために比較的安定している江南地域に流れ込んできた。北また西の地方、黄河流域の先進的な農業生産技術を持つ人々が江南地方に移住することによって、新入りの生産者による土地開発、また彼らがもたらした先進的な生産技術により、江南地方の農業生産は大きく発展を遂げた。宋に入ると、人々は「蘇湖熟、天下足」と江南地方の食糧生産の豊富さをうたっていた。

一方、唐の中ごろ以後、商業区域としての市制度がしだいにゆるんで、宋に入ると、官制商業区域が廃止され、宋以後の市制度の崩壊後、定期市が都市から郷村の至るところで見られるようになった。

樊樹志^{ファンシュジ}は江南市鎮の形成を語る際に、そのような定期市がのち明清時代の市または鎮へと発展した、と指摘した⁸⁾。しかし、日常品を取り扱う定期市がのち明清時代の商品流通の拠点となる市、さらに鎮(市場町)へと発展するには市場の基盤となる商品の生産と流通がなければ成立しないものである。

江南地方は、元代のはじめに綿花栽培技術が伝来し、とくに、蘇州に隣接する松江では、元代に南から進んだ紡織技術が伝えられ、

* 信州大学工学部社会開発工学科 博士前期課程

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Shinshu University

** 信州大学工学部社会開発工学科 教授・博士(工学)

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Shinshu University, Dr. Eng.

ある程度の商品生産が行われていた。明代になると、重税・重租に苦しむ零細農家の副業としての綿織物が急速に普及した。松江は明清時代を通じて綿布紡織業の中心地となった(図1)。

また、中国で創始された絹織物は古くから官営工業であり、農村副業でもあった。漢代から独立手工業も現れたが、唐宋時代をへて明清時代になると、商品生産が進み、規模もしだいにおおきくなった。明代、江南地方の太湖周辺地域では、絹織物生産地の蘇州と、養蚕製糸をおこなう湖州、嘉興による地域分業の形態が成立していた⁹⁾(図1)。それから、清の康熙以後、匠籍制度¹⁰⁾が廃され、賦税の面では、生糸や綿布など手工業品を徴収しなくなり、食糧と金銭のみとなり、また、朝廷用の絹織物を生産する官営工場では、原料となる生糸を商人から直接購入するようになることで、市場に一層の活力をもたらした¹¹⁾。

図1 明代太湖経済区域の産業分布図¹²⁾

こうした商業性農業と連動して、綿布と絹織物を製造する手工業生産が盛況を呈し、また、このような生産地域内部では、原料生産と商品加工との間の分業関係により、綿花、綿布、桑の葉、生糸、絹織物などの間に頻繁な流通が生まれた。古くから水上交通が発達する江南地方では、明清時代に、商品交易の拠点として水辺に多数の市が生まれ、市場網を形成した。そのような江南市場網の中において、蘇州は中心的な存在であった¹³⁾。

一方、蘇州は江南地方に最古の都市とも言われ、その起源は春秋戦国時代の紀元前514年で、『呉越春秋』によれば、大小二つの城郭が外城と内城となって、中国古代都市の典型的な二重城郭の「回」字型となっていた¹⁴⁾。外城には、八つの水陸門が設けられ、城外から水を城内に引き入れ、各城門の間、また内城に至るまで水路を巡らせた、と考えられる。中国古代都市がもつ「面朝后市」¹⁵⁾という後市の制度を考えれば、建設当初城内の市は内城の北側にあった、と推測される。しかし、文献などから城郭内における市場の位置をはっきりと示されていないことで、具体的には不明である。

蘇州の都市形態を鮮明に描いた最初のものは、南宋紹定二年(1229)の『平江図』¹⁶⁾である(図2)。「平江図」を考察してみると、『呉越春秋』に伝えられている蘇州城の創設時の「回」字型の都市形態が受け継がれているものの、八つあった水陸門が五つとなった。城内では、水路と道路が相隣し、河と道が平行する二重の基盤目状の都市形態が完成していた。宋代の地誌『呉郡志』に記載されている市¹⁷⁾を『平江図』にプロットしてみると、内城の西側の

綉錦坊に大市(図2-a)、内城の西北側の干将坊に東市門(図2-b)が置かれている。一方、館娃坊には果子行(図2-c)、和豐坊には米行(図2-d)という専業市も形成されていた。それらの市はいずれも城郭内にあった。特に、干将坊(図2-b)と西市坊(図2-f)は内城の北側の樂橋(図2-e)の両側に位置していて、中国都市運営の後市制度に適應されるもので、唐まで存在した集中市が解体され、総合市場として利用された、と考えられる。

16世紀の初頭、宋、元を経て明に入り、商業の発達により、商品流通の拠点となる市が多数形成され、水路網が密に張られている江南地方では、船が主要な交通手段であるため、市が水陸交通の要衝の水辺に形成されることがほとんどであった。明代蘇州の地誌の『正徳姑蘇志』に蘇州城の市について、「市一月城」と記され、その範囲について、「閶門内出城自釣橋西渡僧橋南為市中心舊有閶門坊両京各省商賈所集之處又有南北濠上下塘為市尤繁盛」¹⁸⁾とあるように、市が蘇州城の西側の門である閶門内外に亘って形成され、

図2 平江図

図3 『姑蘇城図』の閶門周辺

また、市の中心は閶門外にある吊橋と渡僧橋の間と城外に移された(図3)。清乾隆10年(1745)の『姑蘇城図』¹⁹⁾を参照すると、上塘河の南側に上塘街、北側に下塘街があり、そして上下塘街の外縁が南濠また北濠と呼ばれる地域である、と考えられる。

このように、唐までの集中市が宋代では城内に拡散され²⁰⁾、明代になると、ついに城壁を超えた城郭外の北京と杭州をつなぐ京杭大運河の一部である上塘河沿いに市が形成された(図3)。

それから、清代に入り、特に康乾盛世になると、明代に形成された月城市の周辺に、新たに南濠市と山塘市が形成されていた。それに対して、城内では「大市在樂橋稱為市中心古有東市西市穀市小市今皆名存市廢」²¹⁾とあり、城外の繁栄と対照的に、城内の市が廃れていた。

3. 『姑蘇繁華図』

3.1 概要

『姑蘇繁華図』²²⁾は、清の乾隆24年(1759)に蘇州出身の宮廷画家徐揚²³⁾が、乾隆帝二度目の南巡を記念して制作した絵巻物である。その内容は、「其図自靈岩山起由木流鎮東行(中略)自葑盤胥三門出閶門外轉山塘橋至虎丘山止」と自らの跋文に書かれており、地理の順に沿って、大まかに西から東へ、郷村から都市へと絵巻物の画面が展開している(図4の点線で囲む部分)。本論は絵巻物の後半の部分に当たる胥門と閶門の周辺、また、山塘街河の部分を用いている。

『姑蘇繁華図』は、写実を特徴とする中国の現実主義絵画の伝統的な手法を用いて制作されたものである。その系譜にある作品のなかで最も著名なのは北宋の都の汴梁(今の河南開封)の市街風景を題材にした『清明上河図』²⁴⁾である。

清代蘇州の市街風景を知る上で、都市生活の風景などを題材にして描かれた年画²⁵⁾がある。また、蘇州の桃花塢年画²⁶⁾は、江南系の年画を代表するものとして知られている。その代表作品である『三百六十行図』²⁷⁾は閶門外の水辺都市空間を題材にし、雍正12年(1734)に描かれたものであり、本論では、補足史料として利用している。

3.2 画面表現の特徴

『姑蘇繁華図』は、ほかの絵巻物と同様に、景の組み合わせによって画面を構成している。そこでいう景を近景と遠景の二つに分け

図4 『姑蘇繁華図』が描く景物の範囲図
(図中の6, 7, 9, 11は本稿に掲載した図版番号に対応する)

ると、絵巻物に、近景では石積みの目地まで入念に描かれているが、遠景では雲の模様をかぶせ、ランドマーク的な構造物以外は略して描かれている。本論では、検討に用いるものを近景に限っている。

一方、画面に展開する土木構造物や建築物、また船などの細部は、全体の表現を損なわない程度で単純化しながら描かれている。具体的には石護岸の積み方また瓦の葺き方の細部、窓や門など木の枠組のディテールの部分などがあげられる。特に、建物について、間口規模を標準化、定量化して描いている。そのため、建物の相対的な規模を絵画より知ることができる。

しかし、本絵巻物の作者である徐揚が制作したといわれている『姑蘇城図』(1745)²⁸⁾に照合してみると、町並みを構成する家屋の棟数を実情より相当減じて描くなど、空間スケールが実際の場合との相違点が見られる。しかし、本論の目的である蘇州城の附郭に形成された水辺商業空間の分析においては、史料として活用できる、と考えられる。

4. 水辺商業空間の構成とその特質

4.1 蘇州の水辺市場の商業構造とその特徴

明代曹自守の『吳興城図説』に、「閶、胥、盤三門外日附郭。(中略)然自胥及閶、迤邐而西、芦舍櫛比、殆等城中。此僑客居多。」²⁹⁾と記されており、蘇州城の西半城の閶、胥、盤三つの門の外側に附郭(郭外のこと)である、と明確にされた。さらに、附郭では、家屋が連なり、まるで城内のようで、そして、ここの住民は、他の地方から移ってきた方が大半を占めていた、と指摘している。

清に入り、特に康乾盛世になると、江南経済はさらなる発展を遂げ、最盛期を迎えた。蘇州は絹織物の生産中心地である一方で、綿布加工の中心地ともなった。「蘇城内外踰匠、不下万余、均非土著、悉以外来、奸良莫辨。」³⁰⁾と記されるように、原色の綿布を染めた後の「圧平」、「踰光」などの綿布加工の各工程に従事する「踰匠」と呼ばれる職人だけで一万人に上る規模を有し、また彼らはほとんど他地方の方、という。それから、清代の地誌の『乾隆長洲県志』に、「附郭市繼閶閫之際四方巨商富賈鱗集之区燦若錦城紛如海市(後略)」³¹⁾と、附郭の商業の繁栄ぶりを記していた。康乾盛世では、蘇州城の附郭において、前述した明代から形成された月城市に加え、さらに、南濠市と山塘市が形成されてきた。

南濠は上塘河南岸の部分で、明代では月城市の一部分である、と考えられるが、清に入り、『乾隆吳県志』に、「南濠市閶門外直南」³²⁾と記されており、乾隆10年(1745)の『姑蘇城図』から確認すると、閶門外護城河の両側に二本の街路が南の胥門へと伸びている。それは、市の規模が拡大する中、管理上の便宜を図り、月城市に隣接して、新たに南濠市を設立した、と考えられる。それから、山塘市では、清の康熙の地誌の『長洲県志』に、「在城外、離治四五里、即虎丘山塘、亦与閶門相聯(後略)」³³⁾と記されており、本論が用いる絵巻物をみると、閶門と虎丘を結ぶ山塘河沿いには、店舗が建ち並んでいる。

つぎに、清代蘇州城の附郭に形成されたこれら三つの市の特徴を文献史料より捕捉していきたい。まず、月城市について、『乾隆吳県志』に、「金閶市肆絢緞與布皆列字號而布業最巨」³⁴⁾とあるように、絹織物の生産中心地である蘇州の附郭では、綿布業の規模が最大であった。清の康熙40年(1701)の「蘇州府約束踰匠碑」に布

商 79 軒の名が刻まれていた³⁵⁾。また、『乾隆長洲県志』に、「蘇布名称四方習是業者在閶門外上下塘謂之字號漂布染布看布行布各有其人一字號常數十家類以舉火」³⁶⁾と記されており、閶門外にある綿布業者の間では、原色の綿布の染めから、出荷するまでの各工程が細かく分業化され、数十軒の関連店舗が互いに協力して作業を進めていた。各地を遍歴した納蘭常安が、『四編筆記 宜遊筆記』に、「凡自四遠販運以至者。抵抗停泊。必卸而運蘇。開封出售。轉發於杭。即如嘉湖産絲。而紬緞紗綾於蘇大備。價頗不昂。若赴所出之地購之。價反增重。貨且不美。」³⁷⁾と記し、江南の市場網における蘇州の中心的存在を鮮明にした一方で、蘇州の附郭の市における商品の豊富さを訴えていた。

つぎに、南濠市について、『乾隆吳県志』に、「為儲積藥材南北貨販貿之總處」³⁸⁾、また、「南濠則川廣海外之貨萃焉參苓藥物亦聚于是」³⁹⁾と記されるように、各地からの特産物や漢方薬、さらに海外からの品物がここに集結され、江南で作られた絹織物と綿織物を中心とする月城市と異なった商品を取扱っていた。

それから、山塘市について、清の康熙の『長洲県志』に、「儲積商賈。川広諸貨亦駢集焉。」⁴⁰⁾とあるように、商人たちが集まる場所である、と記されている。明清時代に、閶門から虎丘山塘に至りまして、とくに山塘街河の周辺に同郷商人の活動の拠点として数多くの会館が建てられた。記録があるだけで、明代に、広東の商人たちによって領南会館、東莞会館が設立され、清の康熙時代には、岡州会館、全晋会館、高宝会館が設立され、さらに、清の乾隆時代には陝西会館と比陵会館が建設されていた⁴¹⁾。絵巻物を考察すると、山塘河に宴会を楽しむ画舫が往来し、山塘街沿いに大規模な宴会施設の酒樓のほか、盆栽、名人の書道作品や水墨画などを取扱う店舗がほとんどであり、突出した文化消費的な商業空間が形成されていたことを窺うことができる。各地の商人たちは優雅な生活を求め、次々と、山塘街河沿いに拠点を構えていた、と考えられる。

以上の分析から、清代蘇州城の附郭において、江南地方で生産された絹織物また綿織物を取扱う月城市、全国各地から運ばれてきた特産物や漢方薬など取扱う南濠市、各地の商人が活動拠点を置き、文化消費的な商業を特徴とする山塘市、という三つの市が形成されていたことを明らかにした。

4.2 水辺商業空間の構成

絵巻物を通覧して、蘇州城の附郭において、店舗・街路・水路によって構成される水辺商業空間は、次に挙げるような三つの特色ある空間形態が存在したことを見出した。

- ① 店舗－街路－水路 (図 6-a、図 7-a, b、図 9-a)
- ② 店舗－街路－店舗 (水路向け)－水路 (図 7-c、図 9-b)
- ③ 店舗－街路－店舗 (街路向け)－水路 (図 6-b, c、図 9-c)

①の場合では、店舗が街路を挟んで水路向けに開かれている。奥行が深い敷地には数棟の建物が中庭を挟んで展開し、街路沿いの一棟を店舗にしている。また、背後に城壁などで奥行が浅い敷

図 5 水辺商業空間の模式図

地でも、街路側の棟を店舗にし、その奥にもう一棟が展開されている姿が描かれている。絵巻物を通覧して、水辺に石護岸が築かれている場合とない場合が見られるが、これが水辺商業空間のもっとも初期的な形態と考えられる。

この場合、店舗が前面の水辺に水階を設置する例が見られる。胥門外棗市街に、「客寓」の前の水階は客船からの来客の乗り降り用に造られたと思われるが (図 6-d)、「染坊」の前の水階は染物の洗い場として利用されている (図 6-e)。

②の場合は、石護岸が築かれ、①の形態に加えて、水路側に一列の小規模な店舗が開かれている。この形態が特徴的なのは水路側の店舗と水路との間に、小幅ながら人が往来できる道幅を空けていることである。この狭い道は、船が水流方向に逆行する場合、人力で牽引する時に使われる道である、と考えられる。絵巻物には、蘇州近郊の木流鎮に船を人力で牽引する場面が描かれていた。また、清雍正 12 年 (1734) に蘇州閶門付近の繁栄ぶりを描いた『三百六十行図』では、護城河沿いに小道が詳細に描かれている (図 8-a)。この形態は、萬年橋または山塘橋の橋詰めからみることができる。萬年橋の橋詰めの半截街では、一列奥行が狭い平屋建ての店舗が並んでいる。そのうち、「浦城煙行」(間口三間)の前に三隻の小型貨物船が泊まっており (図 7-c)、そして、隣接する「米行」(間口二間)の前には、停泊している船に米を運ぶ姿が描かれている (図 7-d)。また、山塘橋の橋詰めの水辺にある「南河腌肉」「南京板鴨」の看板を掲げる店舗では、商品が店内に積上げられ、店舗前面の水辺に屋根付きの小型船が寄せ合いながら、岸辺にいっぱい泊まっている (図 9-b)。しかし、これらの店舗は街路側に対して、開口部を設け、商売をおこなったかについて、絵巻物から確認することができなかった。

①と②では、店舗前の水路空間を店舗空間の延長として利用することで、水路空間が専用化よりむしろ私用化されることがみられ、それによって私的な空間を創出した、と考えられる。また、これらの場合、水路空間は経済活動の場として利用されることで、商業空間の表側として位置付けられている、といえる。

③の場合、石護岸が築かれ、二列の店舗が街路向けに開かれている。水路側の店舗が水辺いっぱい建てられているため、一定距離において、街路と水路の間を往来するアプローチ空間が確保され、それを周辺店舗が共有していた、と考えられる (図 9-d)。この場合、水路側の店舗が水路を背に、街路向けにすることで、水路空間は、船による交通の利用に特化され、街路で行われる商業活動のサブ空間となり、商業空間の裏側と変わっている。一方、③の場合でも、水路空間の活用が積極的に図られていた。蘇州の伝統的建築は木造の柱梁構造で、妻側の壁が磚積であるが、平側は木で組まれていて、多くの場合は取り外し可能な造りとなっている。絵巻物から確認したところ、ほとんどの店舗は水路に平側を向ける形を取っている。上塘河沿いの店舗は水辺の都市景観を取り込もうと、どれも水路側に大きな開口を取り、水路に対して開放度が高い構成となっている。絵巻物に、上塘河沿いにある一軒の店舗が、木製柱組の壁を全面取り外し、椅子などの家具を前に泊まっている船に運ぶ引越しの光景が描かれている (図 9-e)。

しかし、現在では、水上交通が衰退するとともに、水辺の市が廃れたことで、そうした状況はほとんど失われた。

4.3 水辺の店舗

「金匱一帯比戸貿易負郭則牙倫輾集」⁴²⁾と、清代の地誌に記されていたように、蘇州の附郭における市の経済主体は各種の「牙行」と呼ばれる仲買業者が担っていた。樊樹志は江南市鎮の研究を通じて、市または鎮の経済主体は牙行が担っていた、と指摘した⁴³⁾。牙行は零細手工業者から絹織物、綿織物などを買い集め、それを買い付けの商人にまとめて売出していく方法を取っていた。それは、「物—貨幣」の運動公式による市場であった。

しかし、樊樹志の分析対象となる市鎮は、^{ファンジンミン}范金民氏による江南の市場体系の中の農村小市場と地方専門市場であるのに対して、本論の分析対象である蘇州は全国中心市場と位置づけられており、市場体系の最上層にある⁴⁴⁾。蘇州に拠点を置く商人たちは下層市場からまとめて仕入れをし、それを各地から買い付けにくる商人に売り出していくのが一般的であった。例えば、清代松江府の三大綿布市

場の一つ朱家角鎮では、「本色布、南翔、蘇州兩処莊客收買；（後略）」⁴⁵⁾とあるように、蘇州の商人が朱家角鎮から原色の布を仕入れしていたことが記録されていた。しかし、競争が激しくなるにつれ、商品の質と量を確保するため、経営規模が大きい店舗は、専門市場、さらに、農村小市場に自ら出店をし、直接零細手工業者から買い集める場合もある。清の乾隆時期の綿布市場の外岡鎮に、「蘇郡布商在鎮上開莊收布」⁴⁶⁾と、記されていた。そのように、清代蘇州の附郭には、「貨幣—物—貨幣」という運動公式による市場が形成されていたことを窺うことができる。

絵巻物において、閶門から胥門の間に描かれている、生糸・絹織物、あるいは綿花・綿布を営む店舗は、ほとんどが二階建てであり、間口が二間以上の規模を有している。また、一階にカウンターが置かれ、二階を商談の場として利用する場合が多数見受けられた。街路沿いの一階の店頭には商品が並べられ、一定の小売も行っていた

図6 蘇州胥門外漿市街と南濠街

図7 蘇州胥門外護城河沿いの半截街と万年橋

図9 蘇州閶門外上塘河沿いと山塘街河

と考えられるが、主要な取引相手は買付けに来る客商人のため、二階に専用スペースが設けられ、商談を行っていた、と考えられる。それらの店舗は水路から後退し、街路空間を確保して建つことが一般的だった。また、この種の店舗は中庭を挟んで二棟が連ねて奥へと展開している状況が閶門から胥門の城壁沿いにとりわけ多く描かれている。胥門外の半截街において、柵門をもって、街路側とその奥の空間を仕切られ、絵巻物には生活用水を中に運ぶ場面が描かれ、商売でにぎわう街路側と異なる空間が奥の棟に存在していた、と考えられる(図7-e)。それから、胥門外棗市街にある「蘆蓆老行」では、店舗の棟と奥の棟の間の庭に店頭並べられた商品が置かれていた(図6-f)。

胥門外、「布行・松江大布」、「棉花行・太倉棉花」、「燈籠店」、「復興号・復興老行」、「糖行」といった二階建ての独立屋の店舗が南濠街沿いに建ち並んでいる(図6-c)。それらの店舗は南濠街に面し、護城河を背にしている。『姑蘇城図』(1745)によれば、南濠街は、大運河の一部でもある護城河の西岸に位置し、胥門外の萬年橋と閶門外の吊橋および渡僧橋を結ぶ重要な街路で、その道沿いに商人たちの活動拠点となる三山會館、金華會館など三つの商人會館が描かれている(図10)。また、南濠街は護城河から一定の距離を隔てたところにあり、そこで前述した店舗が建てられた、と考えられる。中にも、「復興号・復興老行」は、二階建てで、間口規模が三間を有している。一階の軒から「雲貴川廣各省雜貨老行」という全国各地の地名を書かれた看板が間口いっぱい飾られ、品揃いの豊富さをアピールしていた。店舗の構成では、街路側に面した一階にカウンターがおかれ、二階は商談の場となっており、絵巻物

図10 『姑蘇城図』の胥門周辺

図11 閶門周辺

では、三つのテーブルにて、客と個別式の商談が平行に進行している姿が描かれている(図6-g)。一方、店舗の水辺には大型船が隙間なく、接しながら停泊しており、また、どの船にも貨物が満載され、中には帆を上げ、出航する船も見られる。

このような大規模の「貨行」が胥門外城壁沿いの半截街に六軒も見られ、そのうち萬年橋の橋詰めに、割長屋の二階建ての店舗が四軒続いて、中でも「発兌人參」という看板を掲げている店舗は間口が三間を有している(図7-f)。一方、胥門外の大埠頭(船つき場)の岸辺にある「南北襟貨」は、二階建てで、間口三間の独立屋で、中庭を挟んで二棟が連なっており、まわりの店舗に比べ、群を抜くほどの規模があった(図7-g)。

附郭の水辺に、「兌換銀錢」、「兌換錢莊」、「兌莊」あるいは「錢莊」の看板を掲げる店舗が、胥門から閶門外の街路または船つき場の周辺に点在している姿が見受けられる。それらの店舗は金融サービスを専門的にこなっていて、市場において重要な役割を果たしていた。胥門外において、胥門接官庁に「錢莊」(図6-h)、棗市街に「兌換錢莊」(図6-i)、南濠街に「錢莊」(図6-j)、半截街に「兌換錢莊」(図7-h)、とそれぞれの場所に一軒ずつ描かれていて、そのいずれも平屋で間口一間という規模が小さいものであった。閶門外では、二階建て、間口一間の「錢莊」一軒(図11-b)と、吊橋の橋詰めの水辺に平屋建て、間口一間の「兌莊」(図11-a)があり、また、上塘河沿いに平屋建て、間口一間の「錢莊」一軒(図9-f)が描かれている。金融サービスの業務はもともと銀兩と制錢の両替のみであったが、乾隆中期になると預金と貸出業務を兼ねるようになった、とされていた⁴⁷⁾。また、莊票という一種の商業手形を発行し、紙幣の代用品として業界で利用されていた⁴⁸⁾。錢莊などは、清代蘇州の金融市場を構成する主体であり、経済活動をおこなう上で欠かせないものであった。絵巻物において、金融サービスを営むこの種の店舗は商業が繁栄する街路、交通が便利な水際、また商人の利用頻度が高い船つき場などの周辺に立地している。

絵巻物を通覧して運輸業を営む「船行」が三軒描かれていた。閶門外吊橋の橋詰めにある「船行」は、水路向けに開かれており、船による運輸業という業務内容に相応しい「面河背街」の形式を取っていた(図11-c)。ほかの二軒は大規模の船つき場が連なり、貨物が集中する胥門外の水路沿いに置かれていた(図6-k, 1)。また、三軒のいずれも、隣接に「錢莊」などの金融サービス業が置かれていた。水上交通を経済活動の基盤とする清代蘇州城の附郭の市場では、貨物または人の運送サービスを提供する「船行」の重要性はとりわけ突出していた。乾隆中期、吳中孚の『商賈便覧』に、「船を雇うには近隣の知り合いでなければ駄目である。かならず船行から一筆いれさせると、途中の吉凶も安心である。ままた悪人がわるさを図っても、足がついているので盗みはやらない。かりに牙行をとおさず自分で船を雇い、顔知らずの人に頼んでしまうと、相手は何かを企んでいるかもしれないので、よく慎重にやるべきである」⁴⁹⁾と記されていた。そのように、商品は必ず官府に認定を受けた信用ある船行に引き受けてもらおうと安心であった。また、船行船戸は商人や荷主から委託を受けると、貨物を数えて、委託人と運送契約をむすび、運賃の全額、あるいは一部を受け取って、貨物を指定の地点や受取人のところまで運ぶという運輸業の業務形態が同書の記録⁵⁰⁾からも窺うことができる。

また、絵巻物には三軒の宿泊業を営む施設が描かれ、二軒が「客寓」（図 6-m, n）で、一軒は「棧房」（図 6-o）の看板を掲げている。三軒の宿泊施設がすべて胥門外の周辺にある。胥門外の護城河沿いには、大埠頭、接官庁、一擺渡、二擺渡といった大型の船つき場が連なっており、商人や旅人が南北を往来する際にならず經由する場所であった。また、胥門外には官制の姑蘇駅⁵¹⁾があった（図 10）。

『中国語大辞典』は「客棧」について、「（規模のあまり大きくない）宿屋、はたご屋；旅商人の商品置場を提供したり、代理運送を引き受けたりするものがあつた。」⁵²⁾と記す。

しかし、絵巻物にある「客寓」あるいは「棧房」が貨物の一時置場、または代理運送などの業務を兼ねているかどうかについては確認することができなかった。

「錢莊」、「船行」と「客寓」のいずれもが商業活動をおこなう上で、欠かせない重要なサービスである。閶門外吊橋の橋詰めの「船行」（図 11-c）に隣接して「錢莊」（図 11-a）が置かれ、また、胥門外棗市街に「客寓」（図 6-m）に隣接して、「船行」（図 6-k）と「兌換銀錢」（図 6-i）が置かれており、一連のサービス業がまとまった形となっている。それと同様に、胥門外接官庁の埠頭の周辺にある「棧房」（図 6-o）と「客寓」（図 6-n）の間に、「船行」（図 6-h）と「錢莊」（図 6-l）が並んでいる。このような店舗の配置は、客商人が利用上の便宜をはかって、形成された、と考えられる。

4.4 水都の宴会

蘇州の水辺にもっとも特徴的なのは、山塘街河における宴遊空間である。『乾隆吳興志』に、「吳人好遊以有遊地有遊具有遊伴也遊地則山水園亭多于他郡遊具則旨酒嘉肴畫船簫鼓咄嗟而辨遊伴則選伎聲歌畫態極妍（後略）」⁵³⁾と記されているように、この宴遊空間は、船で酒を飲み、歌など演芸を鑑賞しながら水路の周辺の景観を楽しむという蘇州流の宴遊スタイルを伴っていた。

4.4.1 水上の宴会空間

絵巻物に、胥門から閶門に至っては、貨物を満載する貨物船や往来する人を乗せている客船でにぎわっているが、山塘橋から虎丘の山塘河には、貨物を運ぶ小型船が 4 隻あるものの、宴遊に利用される「画舫」と呼ばれる宴会用の船が 14 隻も描かれていた。それらの画舫は、規模から大、中、小の三つに分けることができる。

絵巻物に、和合館の前の水面を走行する大型画舫では、華麗な装飾を施されている艚亭、艚艙を通ったところに中艙があり、そこで宴会が開かれている。また、中艙の天井、艚艙屋根の軒から照明用に燈籠が吊り下ろされていた。尾艙は外観から二段構成になっており、手前には厨房またその奥には寝室空間となっている、と考えられる（図 9-g）。それから、中艙の屋根に帆柱が高くそびえていて、絵巻物を通覧して、帆柱は単柱式と三角架構式の二種類があるが、画舫に採用されているのは三角架構式のみで、またそれを有するのは大型画舫に限られている。そのような大画舫が虎丘の前にも二隻が描かれ、いずれも乗員が 13 人程度で、しかし、大型貨物船と同様な走行装置を持つことから、より多くの客を乗せていたことが想定される。大型画舫より一回り小さくなるのが中型画舫（図 9-h）である。小型画舫は、尾艙と呼ばれる部分がなく、船体がさらに小さくなるものの、艚艙と中艙に、装飾が施され、屋根が被せられていた。船尾には湯沸し用の釜と器具のほか、酒入れの罌がおかれていることから、酒用のつまみ程度の食事が提供されていた、と考えら

れる（図 9-i）。

「至于遍布蘇州水上景域（以山塘河為主）的許多中小画舫、多為私家船戶（有一些混營妓業）、乃明清本地「三百六十行」中之一行業也。」⁵⁴⁾と、牛希力が指摘したように、清代では、画舫をもって水上で宴会を営むことは、すでに一つの専門的な職業として成立していた。

4.4.2 水辺の宴会空間

山塘街河において、画舫をもって水上にて宴会が開かれている一方、水辺にも大規模な宴会施設が見られる。絵巻物には、山塘街沿いに二階建て、間口三間の「五簋大菜」（図 9-j）と「和合館」（図 9-k）、また、その先にある桐橋の橋詰めには、二階建て、間口六間の「包辦酒席」（図 9-l）、の三軒が詳細に描かれ、いずれも一階に受付のカウンターまた厨房が置かれており、宴会スペースは主に二階に設置されている。その理由として、山塘河、また、さらにその向かい側への眺めが要因であると想定される。

また、宴会を営む三軒の店舗前の水辺に大小の画舫が泊まっており、中でも「和合館」と「五簋大菜」では客が満員になるほど大変にぎわっているが、水辺に停泊している三隻の画舫では、客が全員降りており、静まりに返っている。それは、画舫での宴会を水辺の宴会施設の「和合館」や「五簋大菜」に場を移して、引き続きおこなわれ、またその後、画舫に戻られ、宴会が続いていくのであろう。

絵巻物には、山塘河の両岸が土岸のままとなっており、水辺に樹木が植えられ、店舗は山塘河から山塘街の道幅を後退して建てられている姿が描かれている。また、山塘街沿いの店舗は、すべて山塘河向けに開かれており、宴会施設以外では、名人の書道、絵画、または、骨董品、盆栽や漆器など蘇州の文化的な側面を反映する商品を取扱う店舗がほとんどである。それによって都市の遊興性が一層高められた。このように、山塘河に開かれている水辺の自然景観と人文景観を融合した景色こそが山塘街河における宴遊空間の最大の魅力であるに違いない。

山塘街河における宴会空間は以上のように、水辺と水上の宴会が水都の魅力的な水辺空間を生かした形で場を構成し、また、これら二つの宴会は密な関係をもっており、互いに支えあいながら、水都の宴会を繁栄させていた、と考えられる。

5. 結び

本論は中国史上有数の盛世である清の乾隆時代の蘇州を描いた『姑蘇繁華図』を中心とする史料を用いて、清代蘇州城の附郭に形成された市の水辺商業空間について考察をおこなった。結果、絵巻物を通覧して、三つの形式の水辺商業空間が並存していたことを確認した。いずれの場合においても、水辺の店舗は水路空間を積極的に活用することが図られ、水路に対して高い開放度を有した。また、附郭において、絹織物・綿織物を取扱う月城市、各地の特産物や漢方薬が集中する南濠市、商人会館が多数設置され、文化消費的な商業を特徴とする山塘市という三つの市が形成された。とくに景勝地の虎丘に至る山塘街河では、遊興性が高い水辺都市空間を有しており、水上と水辺に互いに密に関連する二つの宴会空間が開かれ、特色のある水都の宴遊空間を形成した。一方、店舗では、立地とその空間構成が経営形態に深く関わり、とくに、市の経済主体である仲買業を支える重要なサービス業では、業務の内容と利用上の利便性

をはかった立地形態となっていた。商業が繁栄する街路には金融サービスを提供する「銭荘」が置かれていた。そして、水辺の埠頭には運輸サービスを営む「船行」が置かれ、それに隣接して「銭荘」が設けられていた。また、水陸交通の中心地である胥門の周辺には「客寓」などの宿泊施設が開設され、その近辺に「船行」と「銭荘」が配置されていた。

以上のように、清代蘇州城の附郭市の水辺に設けられた各種の店舗は、経営形態・業務特徴に即して、水路のさまざまな活用方法を示しながら、特色のある水辺商業空間を創出していた。この姿は現在ではほとんど失われているものの、水上交通を経済活動の基盤とする清代の江南地方に共通していた、と考えられる。

注

- 1) 阮儀三編『江南古鎮』（上海書報出版社・三聯書店（香港）有限公司、1998）
- 2) 高村雅彦「鎮の都市構造と住居形式の関係について—中国江南の水郷都市研究 その2」（『日本建築学会計画系論文集』第481号、177-186頁、1996）
- 3) 俞繩方「水都蘇州」（上田篤・世界都市研究会編『水郷都市—リバー・ウォッチングのすすめ』学芸出版社、124-144頁、1987）
- 4) 鈴木充『中国・蘇州市の住宅地形成の研究』（財団法人住宅総合研究財団、1992）
- 5) 王郁・三村浩史・東樋口護「水郷都市・蘇州における旧市街地の歴史的空間形態の変容分析—計画経済期（1949-80'S）について—」（『日本建築学会計画系論文集』第505号、119-124頁、1998）
- 6) 范金民「清代蘇州都市文化繁華の写照—「姑蘇繁華図」—」（熊月之・熊秉真『明清以来江南社会与文化論集』上海社会科学院出版社、268-289頁、2004）
- 7) 盧永春・鈴木充・三浦正幸「清代の江南地方の水辺都市空間—『盛世滋生図』に見る蘇州とその近郊における考察」（『日本建築学会計画系論文集』第506号、177-184頁、1998）
- 8) 樊樹志著『江南市鎮：伝統的変革』（復旦大学出版社、2005）51-96頁参照
- 9) 賀業鉅著『中国古代城市规划史』（中国建筑工業出版社、1996）589-597頁参照
- 10) 匠籍について、「明制凡是有技藝の工匠、均注籍匠戸、官府所需、按籍征調。」とあり、その意味として、明代では、技芸を持つ工匠は必ず匠戸という籍を入れ、官府は必要に応じて匠籍に基づいて徴集をおこなった（段本洛・張圻福著『蘇州手工業史』（江蘇古籍出版社、1986）6頁参照）
- 11) 段本洛・張圻福著『蘇州手工業史』（江蘇古籍出版社、1986）33頁参照
- 12) 賀業鉅著『中国古代城市规划史』（中国建筑工業出版社、1996）593-594頁参照
- 13) 范金民『明清江南商業の発展』（南京大学出版社、1998）130-147頁参照
- 14) 〔漢〕趙曄著、〔元〕徐天祐音注『吳越春秋 卷四 閭閻内傳』（薛正興編『江蘇省地方文獻叢書』江蘇古籍出版社、1999）31頁参照
- 15) 『考工記 匠人 営国』（本論では、賀業鉅著『中国古代城市规划史』（中国建筑工業出版社、1996）206頁参照）
- 16) 〔宋〕李壽明編『平江図』（張英霖編『蘇州古地図』古吳軒出版社、2004）
- 17) 〔宋〕範成大著、陸振岳校點『吳郡志 卷六 坊市』（薛正興編『江蘇省地方文獻叢書』江蘇古籍出版社、1999）70-72頁参照
- 18) 〔明〕『正徳姑蘇誌二（江蘇） 卷十八 卿都』（『天一閣藏明代方志選刊統編 一二』上海書店）80頁引用。ただし、上記の文献では、閶門前の橋を「釣橋」と書かれているが、註19の『姑蘇城図』では「吊橋」と記されている。本論では、「吊橋」を採用している。
- 19) 〔清〕傅椿編『姑蘇城図』（張英霖編『蘇州古地図』古吳軒出版社、2004）
- 20) 伊原弘（1993）『中国人の都市と空間』（原書房）の「『宋平江図』をよむ」によれば、宋代蘇州の商業区域は内城の西北部と閶門一帯を含むと指摘している。一方、本論が用いる宋代地誌の『吳郡志』に掲載されている市は内城の西北部に集中し、閶門一帯については記されていない。宋以後の明代では、閶門一帯はじめて市として、蘇州の地誌の『正徳姑蘇志』に、記載されました。本論では、歴代の蘇州地方政府が編纂した地誌に記載された市を考察対象としており、また、それらの市の位置的な変化を捉えることを目的としているため、閶門一帯について、地誌に記載があった明代に、市として、地方政府に認められ、成立した、と考えている。
- 21) 〔清〕姜順蛟・叶長揚著、施謙編『乾隆吳県志 卷八 市鎮』（1745年刻本）引用
- 22) 〔清〕徐揚著、蘇州市城建档案馆・遼寧省博物館編『姑蘇繁華図』（文物出版社、1999）「序」によれば、原名は『盛世滋生図』である
- 23) 註6前掲范金民「清代蘇州都市文化繁華の写照—「姑蘇繁華図」—」によれば、『石渠宝笈』が著録する徐揚の作品は35点にのぼるが、主要な作品として『南巡図』（十二巻）、『盛世滋生図』（一卷）『平定回部献俘礼図』（一卷）、『西域輿図』（一卷）などがある。
- 24) 『清明上河図』に関する研究として、周宝珠著『「清明上河図」与清明上河学』（河南大学出版社、1997）、伊原弘編『「清明上河図」をよむ』（勉誠出版、2004）などがある。
- 25) 『新潮世界美術辞典』（新潮社、1985）1112頁の「年画」の項、「中国で正月に民家の門や室内に飾る絵画である。」
- 26) 『新潮世界美術辞典』（新潮社、1985）1112頁の「年画」の項、「江蘇省蘇州の桃花塢年画に代表される江南系の年画は、「蘇州版画」または「姑蘇版」と呼ばれ・・・」、また、「蘇州版画」を代表する作品である「姑蘇閶門図」、「三百六十行図」など蘇州の市街地を描いた作品について、田中日佐夫は、「「姑蘇閶門図」や「三百六十行図」（どちらも1734）などが、ヨーロッパ絵画の画法を念頭において制作されたことはまちがいない」と指摘した（田中日佐夫「王舎城美術博物館所蔵「蘇州版画」を見て思うこと—両洋の美術におけるその位置—」（喜多祐士・永田生慈・田中日佐夫・瀧本弘之・徳力富吉郎編『蘇州版画—中国年画の源流—』（殷々堂出版、128-134頁、1992）131頁引用）
- 27) 喜多祐士・永田生慈・田中日佐夫・瀧本弘之・徳力富吉郎編『蘇州版画—中国年画の源流—』（殷々堂出版株式会社、1992）図25の部分掲載
- 28) 註19前掲と同じ
- 29) 洪煥椿編『明清蘇州農村経済資料』（江蘇古籍出版社、1988）8頁引用
- 30) 「045 長洲吳県臨匠碑」（蘇州歴史博物館・江蘇師範学院歴史系・南京大学明清史研究室編『明清蘇州工商業碑刻集』江蘇人民出版社、1981）69頁引用
- 31) 〔清〕李光祚・顧貽祿等編『乾隆長洲県志 卷十一 風俗』（1753年刻本）（卞惠興編『中国地方志集成 江蘇府県志輯⑬』江蘇古籍出版社、1991）98頁引用
- 32) 註21前掲と同じ
- 33) 〔清〕『康熙長洲県志 卷八 市鎮』（本論では、樊樹志著『江南市鎮：伝統的変革』（復旦大学出版社、2005）125頁より引用）
- 34) 〔清〕姜順蛟・叶長揚著、施謙編『乾隆吳県志 卷二十四 風俗』（1745年刻本）引用
- 35) 「043 蘇州府約束臨匠碑」（蘇州歴史博物館・江蘇師範学院歴史系・南京大学明清史研究室編『明清蘇州工商業碑刻集』江蘇人民出版社、1981）62頁参照
- 36) 〔清〕李光祚・顧貽祿等編『乾隆長洲県誌 卷十一 風俗』（1753年刻本）（卞惠興編『中国地方志集成 江蘇府県志輯⑬』江蘇古籍出版社、1991）95頁引用
- 37) 〔清〕納蘭常安著『筆記四篇 宦遊筆記（二） 卷十八 江南三 南廐貨物』（乾隆刻本）（廣文書局有限公司（台湾）、中華民國六十年）951頁引用
- 38) 註21前掲と同じ
- 39) 〔清〕姜順蛟・叶長揚著、施謙編『乾隆吳県志 卷二十四 風俗』（1745年刻本）引用
- 40) 〔清〕『康熙長洲県志 卷八 市鎮』（本論では、洪煥椿編『明清蘇州農村経済資料』（江蘇古籍出版社、1988）276頁引用）
- 41) 牛示力著『明清蘇州山塘街河』（上海古籍出版社、2003）137-140頁参照
- 42) 註39前掲と同じ
- 43) 樊樹志著『江南市鎮：伝統的変革』（復旦大学出版社、2005）246頁参照
- 44) 范金民著『明清江南商業の発展』（南京大学出版社、1998）130-147頁参照。この研究は日本にも紹介され、井上徹「范金民氏の研究の紹介—中国明清時代の都市化の構造を中心として—」（仁木宏編『都市文化研究』第1号、大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター、151-154頁、2003）
- 45) 〔清〕『嘉慶珠里小志 卷四 物産』（本論では、樊樹志著『江南市鎮：伝統的変革』（復旦大学出版社、2005）338頁引用）
- 46) 〔清〕『乾隆統外岡志 卷四 物産』（本論では、樊樹志著『江南市鎮：伝統的変革』（復旦大学出版社、2005）340頁引用）
- 47) 范金民「清代蘇州都市文化繁華の写照—「姑蘇繁華図」—」（熊月之・熊秉真『明清以来江南社会与文化論集』上海社会科学院出版社、268-289頁、2004）278頁参照
- 48) 『大百科事典』（平凡社、1986）765頁の「銭荘」の項参照
- 49) 〔清〕吳中孚著『商賈便覧 卷一 江湖必讀原書』、原文は「写紅無主埠因生歹意：写紅非近隣熟識者不可自惧必由紅行立票前途吉凶得以知之間有歹人窺視亦思有根脚施識不敢為非倘牙自雇紅雙人面生疏交人得以行事因有謀故可不慎之乎」である（乾隆刻本）
- 50) 〔清〕吳中孚著『商賈便覧 卷六 應酬書信』、「託家買貨：適承飛翰并銀若干悉已收到所論置貨隨照單星衣買就俱揀選精好各依字號裝封今交某紅足趕速運來拆逐項認明收入其水脚力已付若干交清貨物該找若干肅此奉復」（乾隆刻本）
- 51) 〔清〕李光祚・顧貽祿等編『乾隆長洲県誌 卷十 驛站』（1753年刻本）（卞惠興編『中国地方志集成 江蘇府県志輯⑬』江蘇古籍出版社、1991）の91-92頁の記載によればその規模は、馬65匹、馬夫65名、河水牽夫138名、船15隻、水夫45名という大規模のものであった。
- 52) 大東文化大学中国語大辞典編纂室編『中国語大辞典』（角川書店、1994）1729頁の「客棧」の項引用
- 53) 註39前掲と同じ
- 54) 牛示力著『明清蘇州山塘街河』（上海古籍出版社、2003）38頁引用

（2006年3月9日原稿受理、2006年9月27日採用決定）